

特選 [MR誕生 100 周年記念論文コンクール『私が目指すMR』]

「私になりたいMRは」

久保田みさき（第一三共株式会社 医薬営業本部 埼玉支店 さいたま第一営業所）

弊社の認知症治療薬を処方頂いている先生のある日の言葉である。

「我々は認知症の患者さんだけを診ているのではない。その家族やその方にかかわるまわりの皆と一緒にみていかなければならない。患者さんを治療するのはもちろんだが、周りの人々のことも考えて最適な治療をしている。」

弊社の薬の効果を先生に伺った時の言葉だが、正直私はこの言葉を聞き衝撃を受けた。

振り返ると私は今まで“患者さん本人”の様子しか訊かなかったと思う。情報提供で私がしてきた事は、薬の効果と副作用の伝達、いわゆるDI（Drug Information）説明と副作用収集であった。また、先生から「患者さんの血圧は下がりましたか?」、「LDL コレステロールは下がりましたか?」などと尋ね、効果があつて良かったと満足することであつたと思う。

この先生のお言葉をお聞きした以降は、MRである自分が、患者さんだけでなくまわりの方の事も考え、先生方へどのような提案ができるのかということをもいつも考えるようになった。

認知症という疾患は徐々に進行し続ける病気として広く知られており、BPSD（行動・心理症状）と呼ばれる症状を伴うことが多く、怒ったり、暴れたり、妄想がでたり、徘徊などの行動障害などもある。それらの症状は家族や介護者にとって非常に大変な事である事も知られている。

私も知識として十分に知っていると思っていたが、知っている事と理解している事は違うという事を痛感した。実際に認知症治療に携わる方々からお話を伺うようになって、患者さんを介護する方がいかに大変か、そして苦労しているかを理解した。そして認知症の患者さん自身も非常に苦しんでいることも。認知症の患者さんは症状などを自身で話す事はほとんどないため、先生方は家族やケアマネージャーなど、介護をされる方から薬の効果や副作用そして症状を訊くのである。そして患者さんとまわりの方の事を考えて薬剤選択をしていくのだ。私もこの薬剤を情報提供するようになってから、医師・薬剤師の先生方、看護師の方だけでなく、介護する方々から様々な情報をいただくようになった。このような生きた情報を得、自身の知識を使って薬の提案をする事がMRの役割だと思ふようになった。

最近、情報社会といわれるまでになっており、特にインターネットの普及が進んだため医療用医薬品の情報は容易に手に入るようになってきた。一般の方でも医療従事者と同じくらい情報は入る。私たちMRの仕事の一つに医薬品の情報提供があるが、それらの内容はネットなどから入手できるものも多いと思う。しかし、医師・薬剤師の先生方だけでなく、介護に携わる方々と接し、患者さんの様子や薬の効果や副作用などの生きた情報はネットなどでは入手できないと思うようになった。私たちMRならば情報提供として伝えることができるし、他の先生方にも提案内容として伝えることができる。

ある患者さんでは「毎日だった徘徊が週2回くらいに少なくなった」、「夕食を作らない人だったが作るようになった」、「薬を増量したら眠気が強い様子だ」、「ずっと笑うことが無かった人だ

けど笑顔が戻ってきた」・・・

そのような話を教えていただくようになり、患者さんのひとつひとつの症状から薬の提案する事はMRにしかできない事だと思えるようになった。

最近では患者さんに合ったテーラーメイドの治療(患者さん個々に最適な治療を提供すること)が求められてきている。自社の薬のみでなく、様々な薬の知識を持っていなければ先生方に有効性と安全性を合わせた提案はできない。高齢者では併用薬剤も多いため、より高度な知識を要する。

処方されている薬が安全にそして有効に使われるように務め、患者さんの笑顔はもちろん、その周りの方をも笑顔に出来るように生きた情報を届けられるMRを私は目指していきたいと思う。

冒頭にMRの役割を気付かせてくれた先生が別の機会にも話してくれたことがあった。

「この前、薬を投与した患者さんの旦那さんがすごく感謝していたよ。認知症の症状で幻視が強くていたけれど、少しずつ(幻視が)なくなって行って、全然笑わなかったのに笑うようになった。患者さんの笑顔が見られるようになったのも嬉しいし、そう話す旦那さんのうれしそうな笑顔を見られたのもとても嬉しいね」

そう話す先生の笑顔に私も嬉しくなって笑顔になった。

MRは製薬企業の一員であるが、同時に医療現場に所属する一員とも思う。目指すべき姿はあらゆる知識を持ち、患者さん自身そして患者さんのまわりの方にも配慮し、安全かつ最大限の効果を提案できる薬のエキスパートではないだろうか。そうなるためには日々新しい事を勉強することはもちろんだが、常に患者さんと家族とまわりの方の笑顔が絶えないことを願い活動することであると思う。